

戦後の時代性を如何にとらえるか

—太宰治「斜陽」の本文生成

A study of Narratology about after World war II
—”Syayo”Osamu Dazai

坂上 幸
Miyuki Sakaue

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 博士後期課程

キーワード：戦後，太宰，斜陽

Key words : After World War II, Dazai, Syayo

1. 研究目的

太宰治「斜陽」は、1947年の『新潮』7月号から10月号に4回にわたって連載された。そのプレテキストとされる太田静子「相模曾我日記」は、太宰死後のスキャンダラスなコンテクストに乗じて、石狩書房が1948年10月に『斜陽日記』という書名で刊行した。両者は母と娘が山荘に引っ越してから母が死ぬまでの生活が語られ、その物語内容の多くは共通している。酷似しているのは物語内容のレベルに留まらず、蛇の卵を焼いてしまった事件や火事事件、ローザルクセンブルクの『経済学入門』を受容する場面等では、物語言説のレベルにおいても一言一句一致する箇所がみられる。

その一方で、「斜陽日記」は母の死をもって完結するが、「斜陽」では母の死後にかず子が自らの「恋」を貫いて、「こひしいひとの子を生み、育てる事」を「道徳革命」として語る。この「道徳革命」について、饗庭孝男は『太宰治論』（講談社、1976年12月）で「やっと母の死後に言葉の上で主張されるにすぎない」と述べ、東郷克美も「《共同討議》『斜陽』をめぐって」（『国文学 解釈と教材の研究』1979年7月）で「『子を生む』というのは非常に唐突で、私生児を生むことが道徳革命に繋がっていくというのは、そのこと自体、十分納得していくようには必ずしも作品は形象されていない」と否定的な見解を示している。では、「斜陽」の語り手かず子は「斜陽日記」と酷似した物語言説を語り、母の死後に「道徳革命」の主張を唐突に展開したに過ぎないのだろうか。

本研究は、「斜陽」と「斜陽日記」の物語内容が位置づけられた時代の相違を比較することで、「道徳革命」は母の死後に唐突に語られたものではなく、女性参政権が行使されて新憲法が成立していく戦後の時代状況のただ中で、かず子が主体的な女性の生き方を模索し続けたことで生成された主張であることを明らかにするものである。

2. 研究実施内容

当初の研究計画では、「斜陽日記」ねつ造問題等も含めて、「道徳革命」の戦後性を太宰の創作意識の側面からとらえる予定であった。だが、「斜陽日記」と「斜陽」の執筆順序を証明することはできない。

別の観点として、野原一夫は「『斜陽』と『斜陽日記』（『新潮』1998年7月）で、両者における転居が位置づけられた時期を比較し、「戦中と戦後との時代の違い」を指摘している。また、「斜陽」において、かず子が語る「道徳革命」を戦後の歴史的事実と対照させる分析は、高田知波の『『斜陽』論—ふたつの『斜陽』・変貌する語り手』（『国文学 解釈と教材の研究』1991年4月）に端を発し、近年盛んに論じられている。このような研究動向をふまえて、テキスト外部の事象に立ち入らず、戦時下から終戦直後の出来事が語られる「斜陽日記」と戦後の出来事が語られる「斜陽」をフラットに置き並べて同一の出来事が位置づけられた時代の相違を比較することで「道徳革命」の戦後性をより明確にとらえることができると考えた。

表1 「斜陽」と「斜陽日記」に共通する
物語内容における時間の比較

物語内容	「斜陽日記」 物語内容の時間	「斜陽日記」 語る地点	「斜陽」 物語内容の時間	「斜陽」 語る地点
蛇事件	1944年11月	母の死後 しばらく経ってから	1946年4月	1946年4月
山荘へ引っ越し	1943年12月		1945年12月	1946年4月
火車事件	1945年8月1日		1946年4月	1946年初夏
ヨイトマケ体験	1945年7月		戦中末期	1946年初夏
「女大学」	1944年5月2日		1946年夏	1946年夏
『経済学入門』	1945年9月		1946年9月	母の死後 (1946年のうち)
天皇	1945年8月と 同年12月6日		1946年10月	母の死後 (1946年のうち)
母の死	1945年12月6日		1946年10月	母の死後 (1946年のうち)

上の表は、「斜陽」と「斜陽日記」双方で共通して語られている主要な物語内容を8つ取りあげ、それぞれ物語内容が位置づけられた時間と語る地点を比較したものである。「斜陽日記」の語り手静子は1945年12月6日に母が亡くなってしばらくたってから母との生活全体を回想して語っている。一方の「斜陽」では、1946年4月から1947年2月7日までの期間の中で、かず子が語る行為とそこから生成される言説が連動しながら進行していく。榎原理智が「語る行為の小説 —『斜陽』の消滅する〈語り手〉—」(『日本文学』1997年3月)で、「ある出来事を語る語りそのものが、その次の瞬間には対象化され出来事として記述され、その記述が次の語りを誘発していく」と指摘しているように、かず子が最終的に語る「道徳革命」は、語り始めた当初からかず子の構想としてあったものではなく、語る行為が何度も繰り返され徐々に蓄積された言説の中から立ち現れてきたものなのである。したがって、「斜陽日記」では語られていない「道徳革命」が何処から芽生えて発展した主張であるのかを明らかにするためには、かず子が語る言説の順序に即して「斜陽日記」との差異を検討する必要がある。「道徳革命」への道行きを考えるにあたって重要な蛇事件、「女大学」に対する態度、『経済学入門』の解釈、天皇の写真を見せる場面、母の死について、位置づけられた時代状況の相違を比較しながら順にたどった。

まず、蛇事件について比較した。「斜陽日記」の語り手静子は、1944年11月に蛇の卵を焼いたことを回想し、そこからさらに、父が亡くなったときに蛇を目撃して母がそれ以来蛇に対して「畏怖の情」を抱くようになったことを思い出し、母に不吉な思いをさせてしまったと恐れていた。母の死後に回想して語られていること、母の死に際で再び「蛇」が登場することを考慮すれば、父の死と結びつく「蛇」というモチーフは、その後に母の死を語るための伏線と考えられる。

対して、1946年4月の地点でかず子が語る「斜陽」の第1章において、蛇事件は「その四、五日前の午後」の出来事として語られている。その物語言説は、「斜陽日記」の物語言説とほぼ同一である。だが、第1章を語るかず子は第5章で母が結核で亡くなったと語ることになることをまだ知らないのだから、母の死と結びつく伏線ととらえることはできない。かず子が強調しているのは、かず子の「胸の中」で母を「食ひ殺」さんばかりにのたうつ強い自我である。また、蛇の卵を焼いた行為を既存の「生活が、とてもたまらなくな」ってしまふような「私のいらいらした思ひのあらはれの一つ」だったと自ら意味づけてもいる。こうして、蛇事件を語ることで自我に目覚めたかず子は、「何も一つも包みかくさず、はつきり書きたい」と自己の内面を表現したい欲求にかられて、「恋」と語り始めようとする。

テキスト外部の1946年4月10日には初の男女普通選挙が行われ、初の女性議員として39名が当選した。永吉寿子も『斜陽』における〈破壊〉と〈犠牲〉—太宰治の倫理性—(『太宰治スタディーズ』2006年6月)で「かず子の手記の起点とは、女性の声が表象可能となるポイントに重なっていた」と指摘しているように、女性が自己の意見を主張し政治に参加できるようになった気運に支えられて、かず子は自我に目覚め、自己の内面を表現したいと思うようになったのではないだろうか。

次に、「女大学」に対する態度について比較した。第1章で自我に目覚めたかず子とその自我を具体的に言語化して主張するようになるのは、1946年夏に投函された上原宛書簡においてである。第4章に引用された3通の書簡のうち、第一書簡の趣旨は「いまの生活からのがれ出」て、妻子のある上原の「愛人として暮らすつもり」だというものである。この主張は、第2章における戦後の状況下で嫁入りか奉公かという要請された女性の生き方に反発し、第3章で戦前に上原から受けたキスを「ひめごと」の内実として提示したことに導かれて生成されている。つまり、上原の「愛人」になりたいという主張は、要請された生き方に反抗して自らの「恋」を貫く道として展開されている。

だが、この女性の生き方に関する主張は容易に受け入れられるものではないとかず子は想定している。かず子は自身の意志を貫くことは、「女大学」にそむく「悪質の犯罪」だと語っている。女性が自

らの意志に基づいて生き方を選択することを許容しない「女大学」とは、近世に貝原益軒が記したとされる女子教訓書のことである。石川松太郎の「女大学について」(荒木見悟・井上忠校注『日本思想大系 34 貝原益軒・室鳩巢』岩波書店, 1970年11月)を参照すると、明治維新以後の「国家権力の家父長的な家族制度の存続・補強」を背景に温存され、戦後まで存続していた制度であると説明されている。

たしかに、「女大学」が権力を保持していた戦中に、「斜陽日記」の語り手静子は過去の離婚を悔い改めて「女大学」を再受容している。1944年の5年前、すなわち1939年に父が夢枕に立ったとき、静子が苦しんでいたのは幼い頃に父から教わった「女大学」の言葉と、それにそむく離婚への意思とのせめぎ合いだった。1944年の父の命日の夜、5年ぶりに夢の中で父に語りかけ、家父長制を支配する存在としての「父」から許される。そして、命日の翌日に静子は「女大学」を再読し、「いましめとして大切に持っていたい本」として再受容している。

このように、戦中に静子が戒めとして受容していた「女大学」に、1946年夏に書簡を執筆するかず子は服従しない。振り返れば、第3章でかず子は、静子と同様に戦前の離婚を回想している。だが、女性が国会で意志を主張できるようになり、戦後民主主義へと向かう1946年夏に立脚するかず子は、過去の離婚を悔い改めることなく、さらに「女大学」に反抗して自身の「恋」を貫く姿勢を表明している。

つづいて、「斜陽」の第5章で語られている『経済学入門』の受容と、天皇についての会話と母の死について検討した。

ローザルクセンブルク著『経済学入門』受容について、静子は1945年9月の出来事として語り、かず子は1946年9月の出来事として語っている。静子は読後に「古い思想を、片端から、何の躊躇もなく破壊して行く、がむしゃらな勇氣」に驚嘆している。一方、終戦から一年が経過した地点に立脚するかず子は、「恋」と「革命」は、共に戦前・戦中においては「最も愚かしく、いまわしいもの」と「思い込んでいた」が、「敗戦後」に「実はこの世で最もよくて、おいしい事」ではないかと考える。前述したように、女性の恋愛は江戸時代から戦後に至るまで存続した家父長制の支配下で抑圧されていた。同様に、マルクス主義に基づく革命

も1925年に制定され1945年10月に廃止された治安維持法のもとで弾圧されていた。両者の共通点は、戦前・戦中には弾圧されていたが戦後にその支配制度が崩壊した点にある。

このように、1946年の4月から9月にかけて自らの「恋」を貫く道を模索し、『経済学入門』の「破壊思想」に基づく「革命」との共通点を見いだしたかず子は、「母が亡くなる直前に「革命家になる」決意を直ちに表明した。この時点で既に、かず子の中では第6章以降で自らの「恋の成就」に向けてひた走る準備は整っている。

それから、「斜陽日記」でも「斜陽」でも、母が亡くなる日の午前中に天皇の写真を母に見せたと語っている。「斜陽日記」では語られず、日本国憲法が国会で成立した1946年10月の出来事として語るかず子のみが語る部分には、新憲法が成立したことで表面化した母娘の決定的な相違が示されている。旧憲法下で高貴な立場を享受していた「最後の貴婦人」としての母は、主権を喪失した天皇の写真に老いを見だし、その姿に自身の身体を重ね合わせるかのように亡くなる。一方で、旧来の「女大学」に反抗して主体的に自らの意志を貫く姿勢を明言しているかず子は、主権が天皇から国民へ委譲されたことを「解放」ととらえ、「道徳革命の完成」へと突き進んでいく。

3. まとめと今後の課題

このように、「斜陽」の語り手かず子が語る「道徳革命」は、母の死後に唐突に展開されたものではなかった。また、主に戦時下の出来事を回想する「斜陽日記」の語り手静子にも語り得ない主張であった。「道徳革命」は女性参政権が行使され新憲法が作成されるただ中の1946年4月から同年10月までの期間の中で、蛇事件を語ることで自我に目覚めたかず子が自身の「恋」を貫く生き方を模索する中で発展させた主張なのである。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

[1]坂上幸「戦後に語られた『道徳革命』—太宰治『斜陽』と太田静子『斜陽日記』を比較して—」『大妻国文』査読有り 第51号 2020年 221頁～240頁